



第8回 論語指導士 半田博愛（第百二十三号）埼玉県

新型コロナウイルスとの共生は、産業革命以降人類が天然資源を無尽蔵に利用してきたことを戒め、

日本に古来から根付く 足るを知り、自然との共生を再考するきっかけをいただいたと認識しております。

しかしながら、物理的接触が抑制され、そのつながりを ICT に依存するようになると、次に訪れる未来は資本と知恵を持つ人、苦しむ人・持たざる人による社会的格差の一層の拡大が生じ、社会不安が高まることになるため、上記の考えを共有することが難しくなる可能性もありましょう。人類の戦争の根本的要因はコミュニティの断絶にあることを踏まえると、次に訪れる未来を良いものとするためには、苦しむ人・持たざる者と伴走し、自走するための人材を如何に輩出していくかが肝要と考えております。

改めて論語に触れ、現代社会、とりわけ経済的・精神的疲弊に苦しむ方々に思いを馳せた時に、

憲問第十四の「子曰、愛之能奈勿勞乎、忠焉能勿誨乎（子曰く、これを愛して能く勞すること勿からんや。忠にして能く誨うることを勿からんや。）」が印象に残りました。

人を愛するからこそ励まさないでおけないし、誠実であるからには教えないでおれない。

変化の激しい未来では、「教える」より「共に学ぶ」姿勢がより重要となる中、苦しむ人・持たざる人と共に学び、伴走しながら社会的断絶を防ぎつつ、足るを知る、自然との共生という思想を世界と共有する社会的な流れが醸成されてくるよう、修身齐家治国平天下を根底に据えながら、地道に活動を続けてまいりたく存じます。

皆さま健やかな生活を送られますよう、くれぐれもご自愛ください。

「加地伸行からの百字答礼」

半田博愛様へ。

古来、人間は血縁者のみならず、血の無縁な人に対しても、優しい愛情を向けてきました。少しでもいい、自分にできることを尽くしましょう。

お気持、嬉しく存じました。論語の愛すなわち仁が今最も求められています。